C-Ⅰ-18　高齢呼吸器疾患患者の社会との関わり

近畿大学医学部附属病院　理学療法部
澤田優子　本田憲胤　福田寛二
近畿大学 医学部呼吸器・アレルギー内科 久保裕一
東田有智近畿大学医学部附属病院 看護部　富森洋子　井上美由紀

【研究目的】

加齢とともに、社会との関わりは減少する。高齢者においては、社会との関わりの低下が、身体的な機能低下を及ぼすことが報告されている。特に、呼吸器疾患を伴う場合、社会との関わりはより希薄になる可能性が高い。本研究では、呼吸器疾患を持つ高齢者の社会との関わりの現状を明らかにし、その関連要因につき、検討することを目的とする。

【対象】

当院に外来通院している60歳以上の呼吸器疾患患者178名（年齢70.5±6.3歳）疾患は喘息、肺気腫、肺繊維症、気管支拡張症の4疾患とした。

【方法】

社会との関わりは18項目からなる社会関連性指標を用いた。社会との関わりの高低と年齢（75歳未満・75歳以上）、性別、罹患からの期間（5年未満・5年以上）、息苦しさ（有無）、現在の気分（良・不良）の関連を検討した。分析は分散分析を用い、有意水準を5％とした。

【結果および考察】

社会との関わりは、息苦しさ、現在の気分の2項目と関連が見られ、息苦しさのない者、現在の気分が良好な者に社会との関わりが高い傾向が見られた。年齢、性別、罹患からの期間との関連は認められなかった。

高齢呼吸器疾患患者においては、社会との関わりをいかに継続しながら、社会の一員として生活していくかが、重要である。本結果は、社会との関わりに年齢、罹患期間などの属性との関連は見られず、息苦しさや気分などの自覚症状との関連のみ見られたという点で、貴重な知見であると考える。

今後リハプログラムの提供においては、自覚症状の改善を加味した内容のプログラムを作成し、自覚症状の変動を詳細に把握し、社会との関わりを維持するよう支援していくことが重要である。

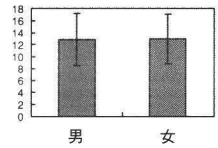

図1　性別

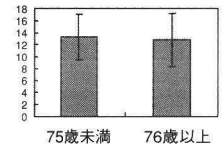

図2　年齢

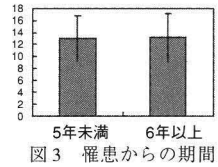

図3　罹患からの期間

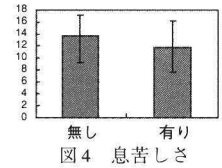

図4　息苦しさ

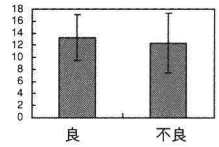

図5　気分